

第十二章 子なる神・聖徒のための再臨

I まだ成就していない預言

聖書のほぼ4分の1は、それが書かれた時点で預言の形をとっていた。その多くが既に成就し、どの場合にも預言されたことがすべて、厳密に字義通りの実現であった。神のみことばはまた、現在まだ成就されていない預言をも多く含んでいる。それらが忠実に、必ず成就すると信じることは理にかなっているのである。

キリストは昇天されたと同じ有り様で、またおいでになる。(使徒 1:11) という事実は、聖書の預言の箇所明白に広範に教えられている。そして、それは聖徒のために来られること(携拳)と、聖徒を従えて来られ、千年間統治されることを区別して考えられている。

この二つの出来事の間には、世界宗教、世界政府、世界戦争等の多くの重要な出来事が預言されている。預言を字義通り解釈するなら、キリストが教会を迎えに来られるのが、これら一連の出来事の最初のものである。

II 携拳についての預言

終わりのときのさまざまな出来事が成就する前に、キリストは聖徒のために来られるという啓示の最初のものヨハネ 14:2、3に見られる。そしてこのことは、後にパウロによってさらに詳しく説明される。(Iテサ 4:13-18、Iコリ 15:51-58) 人の体は生きている者も、既に死んだ者も、そのままでは御国にふさわしくないため、ふさわしい復活の体に変えられるのである。

III 聖徒のための再臨(空中再臨、携拳)と聖徒を従えての再臨(地上再臨)の比較対照

- 1、携拳は明らかに地上から天上へという動きであるのに対して、地上再臨は天上から地上への動きである。
- 2、携拳の際には生きている聖徒たちも移されるが、地上再臨に関しては聖徒はだれも取り去られない。
- 3、携拳の際には聖徒たちは天上へ行くが、地上再臨では聖徒たちは移されることなく地上に残る。
- 4、携拳の際には世界は変えられておらず、さばかれず、罪のうちに存在し続けている。だが地上再臨のときには、この世はさばかれ、地上に義がうちたてられる。
- 5、教会の携拳はその後に続く怒りの日からの解放であるが、地上再臨は患難の時代にキリストを信じ、生き残った者たちの解放である。
- 6、携拳は、今すぐにでも起こる出来事として述べられているが、地上再臨は多くの前兆や出来事がまず起こった後で実現する。
- 7、携拳は新約聖書だけに表されている真理(奥義)であるが、地上再臨は旧約、新約の両方に示されている教理である。
- 8、携拳は救われたものだけに關することであるが、地上再臨は救われた者も救われて

いない者にも関係している。

- 9、携拳の際にはサタンは縛られておらず、地上再臨の際にはサタンは縛られて活動できなくなる。
- 10、携拳の前に成就する預言はないが、地上再臨の前には多くのしるしが成就しなければならぬ。
- 11、キリストが王国を設立されるために来られることと関連した聖徒の復活について語られるとき、生きている聖徒が同時に移されることについてはどこにも触れられていない。実際のところ、千年王国で役割を果たすためには、生きている聖徒たちは生来のからだを保持している必要がある。
- 12、地上再臨を描写した一連の出来事の中に、携拳のような事件の入る余地がない。マタイ 25：31－46 で、このときまだ信者と不信者が混じりあっている。しかし、携拳が起こっているなら救われた者は既により分けられているはずである。
- 13、携拳が教会に関係しているのに対し、地上再臨はイスラエルと異邦人の信者、不信者に関係していることが明らかである。

I テサ 1：10 でもわかるように、クリスチャンの望みは患難時代を生き抜くことでなく、そこから救い出されることである。携拳は慰めを与える望み（ヨハネ 14：1－3、I テサ 4：18）清める望み（I ヨハ 3：13）祝福された喜ばしい期待（テトス 2：13）である。